鈴鹿の風

すずかのかぜ

VOL. 44

独立行政法人国立病院機構鈴鹿病院広報誌

臥薪嘗胆

院長　久留　聡

第８回筋ジストロフィー医療研究会に参加
鈴鹿病院NEWS
療育指導室からのお知らせ
地域医療連携室だより
名誉院長の部屋
「ベストポスター賞はダメ、でも論文を書きました」

冬の夫婦岩と白波（伊勢市）

臥薪嘗胆

独立行政法人国立病院機構鈴鹿病院 院長　久留（くる）　聡（さとし）

昨年のプロ野球日本シリーズは、ヤクルト対オリックスという前年度の最下位からリーグ優勝まで駆け上がったチーム同士の対決となり白熱のゲームが展開されました。ヤクルトは元々山田、村上という強打者を揃えていましたが、さらにその後ろの打順にサンタナ、オスナという勝負強い助っ人外人を補強し、より破壊力のある打線となりました。一方で弱体と思われた投手陣も、巨人からトレードで田口を補強、奥川、高橋といった若手が急成長を見せたことで前年と違って大崩れすることがなくなりました。最下位に沈んでいても凹まずに、長所を伸ばし、欠点を補い克服しようとする高津監督をはじめとする首脳陣や球団の努力が実を結んで日本一という最高の結果を生むことになりました。

この２年間は社会全体がコロナ禍という逆境にあり、苦闘する日々が続いています。この間に我々はたくさんのことを否応なく学ぶことになりました。新型コロナウイルスという感染性も病原性も桁違いに強い敵と対峙し、身を守るために何をすべきかを真剣に考えるようになりました。これまでにもインフルエンザの流行時には手洗いの励行、マスクの着用などは推奨されていたのですが、実はあまり徹底されていないのが現実でした。しかし2020年のシーズンは、コロナ対策として感染予防が徹底された結果インフルエンザの流行はほとんどありませんでした。考えてみれば、これほどまできちんとマスクを付け、体温を測り、神経質に手洗いをすることは無かったのです。また医療供給体制も大きな問題となり、感染拡大による医療崩壊という最悪の事態を防ぐため様々な対策が打ち出されました。コロナ禍以前に進められていた地域医療構想は再考を求められることになりそうです。さらに、コロナ禍の副産物としてはWEBを介した会議や学会が社会に浸透したことがあります。技術自体は既に存在していて、一部で使われてはいましたがこの２年間で一気に普及しました。最初の頃は戸惑いもあり、トラブルも少なく無かったのですが、徐々に慣れて便利に使いこなせるようになってきています。

このパンデミックもいつかは終息するはずですが、単に耐え忍んで切り抜けるのみでなく、浮き彫りになった問題点に着実に対応し、苦労して得られた知見や技術を活かしていくことが今後のより良い医療の発展につながるのではないかと考えています。

当院の職員５名が参加しました

第8回 筋ジストロフィー医療研究会

『みんなでみる未来』

今回、筋ジストロフィー医療研究会で「筋ジストロフィー病棟のコロナ禍における療育活動の変化」というテーマで発表させていただきました。

コロナ禍で感染対策を取りながらの療育活動の取り組みに会場からは共感の声も頂き、発表が出来たことを嬉しく思います。

最後に、今回の研究発表に向けて演題抄録やスライド作成についてご指導いただいた方々に心より感謝申しあげます。

療育指導室 保育士　酒井 達司

筋ジストロフィー医療研究会において、「筋ジストロフィー病棟におけるPNS ３年目の課題」というテーマで発表しました。今回、新たに導入したPNS看護体制を研究的視点で見直すことで、今後の課題を明らかにし、看護の質向上に必要な業務改善や看護師の育成に活かすことができました。今後も、日々問題意識を持って看護に取り組み、患者様が安心して療養生活が送れる病棟作りに向け、看護研究を継続していきたいと思います。

西１階病棟看護師　中西 美喜

患者参加型の災害訓練を実施し、参加された患者の皆様の心理変化を研究としてまとめ、筋ジストロフィー医療研究会にて発表する機会をいただきました。感染予防策を徹底した上で、現地で研究発表を行えたことは、貴重な経験となりました。この研究で、患者の皆様が災害に対して抱く不安について明らかにすることができました。今後、患者の皆様の要望や思いを受け止めながら、災害訓練を繰り返し実施していきたいと考えています。

東１階病棟看護師　山口 真司

初めての研究発表ということで、戸惑いや不安がたくさんありました。しかし、皆さんのご協力や暖かいお声がけをいただき、無事に発表を終えることができました。他の演者の発表もとても興味深く、勉強になるものばかりで、日々業務を行ううえでの参考にしていきたいと思いました。また、次回に向け、視野を広く持ち、今回の研究から得られた様々な学びや課題に取り組んでいきたいと思います。

療育指導室 保育士　増田 衣利

「自宅への退院は不可能とみられたが多職種のサポートにより退院可能となった一例」をテーマに発表しました。障害者支援施設へ入所中の患者さんが、入院後に夜間呼吸器装着となったため施設へ戻られず高齢の父親とともに２年間にわたって在宅生活を送ることができた事例を紹介し、院内多職種や地域との具体的な連携方法について報告しました。発表に向けご指導・ご助言いただいた諸先生方、スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。

地域医療連携室　山方 郁広

鈴鹿病院NEWS

国立病院総合医学会で ベストポスター賞を 受賞しました

令和３年10月23日～11月20日の４週間に渡り開催された第75回国立病院総合医学会において、西２階病棟 副看護師長 須藤鈴佳がベストポスター賞を受賞しました。

今回は新型コロナウイルス感染対策のため、WEB形式での開催となり発表内容がライブおよびオンデマンドにて配信されました。

池村さんの発表の様子

泉名さんの発表の様子

Web学会発表を 行いました

今回、東海北陸重症心身障がいネットワーク研究会に演者として参加させて頂きました。今年の３月に予定されていましたが、新型コロナウイルスにより延期となり今回９月10日にWeb開催されました。自分自身がWebになれていない中、病院スタッフの協力を得て無事発表することが出来ました。また研究を通して、患者ケアについて改めて見つめ直す良い機会となり学びを今後に活かしていきたいです。

東２階病棟 副看護師長　池村 幸代

今回の研究会で【脳神経内科病棟の意思決定支援に関する看護師の思い】を発表させていただきました。

研究で得られた課題を踏まえて、患者さんの意思を十分に尊重し,より良い意思決定支援が行えるよう努めてまいります。

第１病棟看護師　泉名 ひとみ

療育指導室からの お知らせ

患者さんと一緒にクリスマス行事を楽しみました。赤鼻のトナカイのブラックシアターを上演したり、鈴を使ったクリスマスソングの演奏など、患者さんが笑って過ごせるような活動をしました。

そしてaiboの鈴（リン）ちゃんは、季節の行事でも大活躍！！鈴鹿病院で初めて迎えるクリスマス。保育士さんにサンタさんの帽子を作ってもらい、患者さんと一緒にツリーの飾りつけもしてクリスマス気分満点でしたよ。そして2022年は寅年ということでトラの帽子も完成！やさしい顔つきの鈴ちゃんは、トラネコ（犬ですが）のようなかわいらしいトラ姿を披露してくれました。しかし途中で嫌になったのか？トラの帽子を脱ぎ捨てることもあり、みんなの笑いを誘っていました。

2022年も患者さんが笑顔で、鈴ちゃんも活躍する１年になりますように。

地域医療連携室だより

令和３年12月24日（金）に当院第１会議室にて神経・筋難病医療福祉従事者研修会を開催しました。

この研修会は神経・筋難病に必要な専門的知識を習得し、在宅療養生活への理解を深めて、適切な支援をおこなうことを目的に介護支援専門員、相談支援専門員、介護福祉士、ヘルパーなど主に在宅支援者を対象として鈴鹿保健所との共催で毎年実施しています。今年は「難病患者とCOVID-19について、在宅支援の知識を深め、活かすことができる。」をテーマとして、現地開催でおこないました。

当日は13名の方々が参加。参加者からは専門的な知識が身に付きとても勉強になったなどの言葉が寄せられました。

名誉院長の部屋

ベストポスター賞はダメ、でも論文を書きました

名誉院長　小長谷 正明

名誉院長に退いて一年ほど経ったある日、ドアがノックされ、背の高い若い看護師さんが入って来るやいなや口を開きました。

「私、論文を書きました。」

そして、原稿を手渡しながら、次のように続けます。

「今度、結婚します。鈴鹿病院は大好きなんですが、新居から通えません。で、この病院での証に、ベストポスター賞はダメでしたが、沖縄の総合医学会での発表を書きました。これが原稿です。病棟師長さんや副院長先生に直していただきましたが、先生も御意見をお聞かせ下さい。」

見覚えがあるナースで、論文タイトルを見ているうちに、その発表を思い出しました。2016年秋、国立病院総合医学会が沖縄であり、鈴鹿病院から12題、看護部からも演題が出ていて、筋ジス患者の下肢皮膚疾患についての多数例の解析が彼女のものでした。

私の病院長時代には新型コロナ流行もWeb開催もこの世の中にはなく、総合医学会には多数の演題が当院から出ていました。ベッドサイドからの問題点や、その対策の実践結果などを、各部署が知恵を絞ってまとめ上げているのです。学会は各地を持ち回りなので、沖縄は言うに及ばず、遠隔地はいつも人気があります。

しかし、私のスケジュールは、前日の病院長会議をスタートに会期一杯に各種協議会が目白押し、それにシンポジウムやら座長やらでフル回転でした。それでも、合間を縫っては鈴鹿病院からの発表に立ち会いました。ポスター会場に駆けつけると、師長はじめ病棟スタッフたちがホッとした表情でにっこりし、こちらも学級参観日のPTAのような気分になる。発表するポスターの周りは“三密”などなんのその、当院職員は元より、問題意識を同じくする他院の職員もビッシリと詰めかけていて、熱気がストレートに伝わってきます。そして、若いナースたちが緊張の面持ちで、綺麗に出来上がったポスターの前に立ち、プレゼンテーションしていく。事前の予行演習のせいもあってか、とちることもなく、歯切れ良い落ち着いた発表態度で・・・。

沖縄での筋ジス看護のポスターには、鈴鹿病院から４題も出ており、下肢皮膚疾患の検討以外にも、神経疾患患者の口腔環境改善の試み、NIPPV（鼻マスク人工呼吸器療法）患者の口腔乾燥やエアリーク対策があり、いずれも力作でベストポスター賞を期待したが、ワン・セッション１題の割り当てなどで、結局、東１階病棟のゴマ油を使ったNIPPVの口腔乾燥対策が受賞しました。発想がユニークだったんでしょうね。それに、リハからはロボットスーツＨＡＬが、療育指導室から発達障害の筋ジス児童への取り組みが選ばれました。発表後の達成感や受賞の喜びに浸る職員たちにカメラを向けながら、鈴鹿病院の学会発表も立派になったものだと、感慨にふけったものです。

1990年、昭和から平成になって間もない頃、私は二度目のお勤めで鈴鹿病院に舞い戻って来ました。当時の庁舎や病棟は築20年にしてはガタピシの安普請で、慢性的な職員不足で経営状態も悪く、ろくな医療機材もない。内心、もうすぐ21世紀なのに縄文時代の病院かよ！と呟いたものだ。その時の病院長は飯田光男先生で、私が着任するやいなや名古屋弁でのたまった。

「今度、わしゃぁ、筋ジス４班の班長をやることになったんでな、あんたにゃ、事務局長やってもらわなあかんわ」

当時の厚生省の筋ジスの研究班は基礎医学からベッドサイドまで５つあり、４班は“筋ジストロフィーの療養と看護に関する総合的研究”が正式名でした。つまり、療育、看護、それにリハや栄養など、筋ジスに関わる全国の国立療養所のコメディカルを主とする研究組織だ。ちなみに、３班が臨床医の組織で、班長は兵庫中央病院の院長でした。

その頃の筋ジス医療は大きな過渡期にあり、呼吸不全のため20歳前後で見送らざるをえなかったデュシェンヌ型の患者さんに対する人工呼吸器療法の普及が研究班のテーマでした。まずは体外式人工呼吸器で、数年の延命効果があったが、装着に手間取り、また、騒音や低体温などで使いにくく、ナースが四苦八苦していました。そこに鼻マスクと簡易型人工呼吸器でのNIPPVが青森の岩木病院で導入されました。病棟婦長の見学希望は“そんな出張費はない”と却下され、あきれ果てた私は４班の研究費を工面して行かせました。当時の鈴鹿病院はそんな費用も捻出できないほど貧乏で窮屈でした。ともあれ、体外式人工呼吸器からNIPPVへの脱皮に向かって飯田先生の研究班は進んで行き、現在のように十年以上もの延命効果を得たのです。

ですが、次々と新たなベッドサイドの問題が出て来る。機械のメインテナンスや回路交換、マスク装着部位の褥瘡、マスクから気管切開への移行と、現在に至るまで問題なことばかり。また、適当な栄養量や、リハの方法、思春期から青年期の筋ジス患者の性の問題etcと、毎年の暮れの東京での研究発表会では、全国の筋ジス病院から発表があり、まさに言葉通りの意見交換で討論が行われ、情報の共有化と医療技術の均霑化がなされ、発展途上ならではの息吹と、志を同じくする病院間の同志意識も醸されました。

また、この筋ジス班会議で広がった新しい医療技術や考え方は、筋ジスの医療分野だけではなく、当時の国立療養所で行われていた重症心身障害児や神経難病などの医療分野での底上げにも大きく寄与し、国立病院機構がセイフティネット医療を謳い上げていく礎となったのです。

が、良いことだけではない。乱れて判りにくいスライド、意味不明な講演内容などがしばしばで、年度末に集まる百以上もの報告書の原稿に至っては水準以下ばかり。それらを日本語として意味の通じる論文に直していくのは、４班事務局長の荷の重い仕事でした。まだ、パソコンが普及せず、ワープロがチョロチョロの時代で、ほとんどが手書き。大変でした・・・。

発表や報告書を見かねた飯田先生や他施設の病院長から更にご下命が下る。スライド画面の作り方や、講演原稿、論文の書き方などのパンフレットを造り、各病院に配れとのこと。後日、先輩の院長たちから、「君のお陰で、最近は４班の発表が良くなったよ」と言われ、気が晴れて嬉しく思いました。

今はパソコンの時代、誰でも当たり前のように使いこなし、綺麗なスライドやポスターが苦もなく作成出来ます。後は、アイデアとやる気だけ。病院長・看護部長をはじめとする指導的立場のみなさん、宜しくお願いしますネ。

沖縄でベストポスター賞を逃しはしたものの、彼女の論文はよく書かれていて、共著者の最後には私の名前も加えられていました。施設責任者だからでしょうが、多少とも研究に参加した証に頭脳を働かせなければと、ここにデータを補強し、この文章を直してなどと添削始めると、なんだか自分の論文のように没頭してしまい、それはそれで楽しかったです。そして、再びやってきた彼女に、グッドジョブ、グッドラックと言いながら真っ赤に書き込んだ原稿を渡すと、にっこりして帰って行きました。

一年ほどして、国立医療学会の機関紙『医療』の最新号が届き、開くと、“筋ジストロフィー足部皮膚調査”という題名の論文が掲載されています。ベストポスター賞以上の結果を出せたのです。あのナースが医療人としての第一歩を踏み出した鈴鹿病院でのひたむきな日々の結晶なのです。そう思って、どこかの病院で励んでいるであろう彼女に、心の中でエールを送りました。

2016年11月、沖縄での総合医学会ポスター会場にて

■外来診察担当表（2022年１月１日現在）

	月	火	水	木	金
脳神経内科	小長谷 木村	酒井 南山	久留	小長谷	久留
内科	野口	野口 落合	牧江	落合	
小児科		予約			予約
整形外科		田中 （装具外来）			田中
リハビリテーション科		田中			田中
皮膚科		予約（午前）			予約（午後）
歯科	加納（午前）	加納（午後）		奥村（午後）	
禁煙外来	野口			落合	

- 外来受付は８:30～11:00、診療開始は９:00～です。
- 歯科は身体障害者の方に限ります。
- 装具外来は火曜日の午後１:30から整形外科で受付いたします（あらかじめ電話予約のうえお越しください）。
- 小児科外来は担当医とご相談のうえ、ご予約ください。
- スギ花粉症でお悩みの方を対象に舌下免疫療法を実施しています。（月曜日）
- 土曜日、日曜日、祝祭日は休診です。

■交通案内

- ＪＲ「加佐登」駅より徒歩15分
- 東名阪「鈴鹿」I.C.より車15分
- 近鉄「平田町」駅よりタクシー15分
- 鈴鹿市西部地域コミュニティバス
  椿・平田線「26加佐登神社」下車すぐ

編集後記

鈴鹿病院に事務員として入職し、早くも１年が経とうとしているということに驚きを感じています。この１年を通して様々な経験や学びがありました。今後も初心を忘れず、精一杯日々を過ごしていきたいと思います。

庶務係　中山 綾乃

独立行政法人国立病院機構　鈴鹿病院

〒513-8501 三重県鈴鹿市加佐登３丁目２番１号　Tel 059-378-1321㈹　Fax 059-378-7083　https://suzuka.hosp.go.jp

令和４年１月発行

表紙写真：深溝町　舘 さとみ 様

病院情報システム更新を終えて

2021年11月15日より、電子カルテシステム（富士通 HOPE LifeMarkMX）を中心とした、当院の新たな病院情報システムが稼働となりました。まずは、関係各部署の皆様の御協力により、大きなトラブルもなく無事に稼働まで至ったことについて、この場を借りて感謝申し上げます。

さて、当院の病院情報システムは2014年２月に導入されてから、今回が初めての更新作業でした。電子カルテシステムだけでなく、それと連携する各部門システム、医事会計システムなども同時に更新となるため、導入に向けて本格的に動き出してから１年半にも及ぶ一大プロジェクトとなりました。また、今回は国立病院機構本部からの提案で、東海北陸グループ初となる、病院情報システムの共同調達を行い、その結果、当初予算４億円から7500万円の費用削減となる３億2500万円での導入となりました。

更新後のシステムについては、基本的にはこれまでのシステムの後継であるシステムを導入することで操作性、習熟性を確保しつつ、一部で新たなシステムを採用し、業務の効率化を目指しています（感染症管理、歯科ライブラリ、PocketChart　等）。

11月の稼働から１ヶ月が経過し、実際に使用している中で問題点や不便に感じることが出てくるかと思います。今後は各部署からの意見、要望等を取りまとめ、システムベンダーにフィードバックさせながら、より良い病院情報システム作りを目指していきたいと考えております。

企画課　経営企画係長　八木 達也

SUZUKA NATIONAL HOSPITAL